

氏名(国籍)	柳 京子 (韓国)
学位の種類	博士(教育学)
学位記番号	博乙第2382号
学位授与年月日	平成20年5月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	日本語音声の言いあやまり研究 - 韓国人に対する音声教育の観点から -
主査	筑波大学教授 博士(教育学) 塚田泰彦
副査	筑波大学教授 博士(理学) 井田仁康
副査	筑波大学教授 博士(教育学) 吉田武男
副査	筑波大学教授 博士(心身障害学) 四日市章

論文の内容の要旨

1. 目的

本研究は、言語教育実践、特に第二言語習得過程の研究に大きな示唆を与えている言いあやまり研究を、理論的・方法的に精緻化することを第一の目的としている。具体的には、インターランゲージの研究を理論的に洗練することで、言いあやまりの研究を言語の普遍性についての研究と言語習得理論の研究とを統一的に価値づけるものと位置づけて、第二言語教育のための新たな応用言語学的展望を得ようとするものである。また、本研究では、この成果に基づいて、音声教育の分野での言いあやまりについての新たな調査研究の枠組みを構築し、その枠組みによって調査研究を行い、言いあやまりの実際を体系的に捉えることを第二の目的にしている。さらに、この一連の調査研究にもとづいて得られた知見から、具体的に韓国人における日本語音声教育の指導案を提案することを第三の目的にしている。本研究は、第一と第二の目的についての理論的な考察と、第三の目的のために行われた精緻で体系的な実証的研究からなる。

2. 対象と方法

本研究は、まず、言いあやまり研究を第二言語習得研究の一つの方法として位置づけ、この方法を理論的に洗練するために、言いあやまりの研究史の成果を分析し、方法論上の問題点を析出した。この成果を受けて、本研究では先行研究で明らかにされていない次の3点を主たる対象に研究を進めている。1) なぜ、言いあやまりが起こるのか、その原因を探るために特に注目されているインターランゲージに関する仮説を設定し、この仮説を言いあやまりの調査研究を通じて検証する。2) 従来の主観的な方法に依拠してきた点を批判的に捉えて調査研究を計画し、調査資料の検討や分析結果に基づく研究を行う。3) 1) と 2) の調査結果に基づいて、韓国語を母語とする学習者に最も効果的であると思われる教授法である言調聴覚法を導入し、それに基づいて韓国人における日本語音声教育の指導案を提案する。

3. 結果

本研究の結果は次のとおりである。1) 言いあやまり研究で重要視されてきた言語理論の一つである、コンピタンスとパフォーマンスの問題に焦点を当てて、言いあやまりの概念を洗練した。2) インターランゲ-

ジ仮説に再検討を加え、言いあやまり研究におけるインターランゲージ研究の教育的意義を明らかにした。3) 音声面について日本語と韓国語の対照研究を行い、言いあやまり研究の観点からみた韓国語を母語とする日本語学習者にとって困難が予測される日本語音声教育上の問題点を明らかにした。4) 日本語音声における分節要素と超分節要素について聴覚的・音声（調音）学的・言語学的研究を行い、日本語の音声（調音）学的な特徴に焦点を当てて、日本語の言いあやまりについての調査研究を行い、データの収集と分析を行った。5) 調査の分析結果に基づいて、韓国での日本語音声教育方策を統合的に立てるための基礎的資料を確認した。6) さらに、日本語の音声（調音）学的な特徴を分節要素と超分節要素に分けて考察を進め、日本語専攻の韓国人留学生と日本語専攻でない韓国人留学生についての差異などを明らかにした。

4. 考察

これらの研究は、言いあやまり研究の日本語教育への応用可能性を具体的に明らかにしようとしたものである。特に、研究方法上の次の問題点を改善したことは本研究の成果の妥当性を担保するものと評価できる。1) これまでの言いあやまり分析が出現時点での解釈に終始したために、原因の説明が困難であった点、また、誤りの発生を待つ方法では学習者の心理的抑制によって真の問題点を探り出しにくい点、こうした課題を体系的な調査研究によって改善したこと。2) これまでの言いあやまり研究は、科学的な厳密さに欠けるため、同じ方法を用いた別の研究者による再確認が困難であった点を改善したこと。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、インターランゲージ仮説についての先行研究を精緻に検討することで、言いあやまり研究を方法的に洗練し、未開拓に近い日本語教育の音声教育分野での実証的研究に新たな方法的展望を開いた点は高く評価できる。また、研究として皆無とっていい、韓国語を母語とする日本語学習者を対象に行われた言いあやまりの研究について実証的な調査研究に基づいて体系的な記述研究を行ったことは、単にこの方面の先導的な研究として位置づけられるだけでなく、言語の本質に関与的な位置づけを行いつつ、第二言語習得過程の研究をいかに教授法へと反映させるかについても示唆的である。実際、本研究が、韓国語を母語とする日本語学習者に対する IPA (International Phonetic Alphabet) の発音表記体系の活用を提示したこと、また、言調聴覚論に基づいて言調聴覚法 (VT 法) を導入し、韓国語を母語とする日本語学習者における日本語音声の分節要素と超分節要素について不自然さを改善する音声指導方法を検討したことは注目すべきオリジナルな成果として、言語教育研究に大きな意義をもつものと判断できる。

ただし、本研究の調査結果は被調査者の数が十分ではなかったため、結果を一般化するためには、より多くの被調査者を対象にした継続的な研究が必要である。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。